

ねえ、あたしはどこで生まれてどこで育ったの。そう訊ねると、母は短く答えた。金魚鉢よ。

金魚鉢でわたしを育てたと母は云う。まさか本気だとは信じなかったが、数日後に贈られた金魚鉢を見ると、幼いながらに仰天してしまった。

金魚鉢にはね、特別なひとだけが棲めるのよ。

信号が点滅している。わたしたちが着く頃には赤になってしまつて、立ち止まった振動で傘が滴を落とした。小雨なのになあ、とミミズクが云う。わたしは気の抜けた声で、そうだね、と返した。

滴の行き先を見下ろすと、地面に吸いこまれていった。逆さまに雨が降っているみたい、と思つてみる。すぐ隣でミミズクがなにか云つたけれど、わたしは真剣な顔で、うん、と云うふりをした。

遠くからサイレンの音が聴こえる。霞んだ傘の隙間から周囲を盗み見ると、小さな麻雀屋が好きになった。ひとりの青年が、店の前に屈んでいる。

その青年は、麻雀屋のマットを傘も差さずに洗っていた。

ひと昔前からあるような麻雀屋で、誰も見向きもしない。入口を覆うパラソル生地の屋根が、どうにも小さすぎて青年に届かなかった。それでよかつた、とわたしは思う。

またミミズクが話した。なにか教えてくれたようなので、そんなんだ、と答えた。

青年は赤いマットをさつと梳いて、澱んだ水を掃き出す。器用な手つきだつた。長身だろうと思う。男のひとにしては首や腕が細く、手首の骨が太く見えた。

青年の黒いエプロンに、やわらかい小雨が染みこんでいく。その腰の紐は縦結びだつた。

鳥の声が鳴る。信号が青に変わっていた。すこし遅れたことに気付かれぬように、わたしは小走りでミミズクの隣を追う。サイレンの音に耳を貸すふりを、さりげなく青年を振り返つた。

行方不明の子に似ている気がする、と、思う。わたしが中学のときになくなつてしまつた子。たしか、水溜まりに溺れて死んでしまつた子だつたか。

春猫を手に入れよう、と思つた。

ベランダで昼間からビールを飲みながら、そうそう春猫ね、と考えたのだ。

丁度よく母から電話があつて、金魚鉢の具合を訊かれたということもあつた。母は月に一回、金魚鉢の具合を訊ねてくる。一人暮らしの娘を探る目的だろうが、ほんとうのところはわからない。

わたしはミミズクとお茶のことを黙っていた。云つても云わなくてもどっちだつていいのだろうか、ミミズクに誘われてすぐに、母にはなんて云おうと思つた時点でよくないと考えた。

ミミズクとはお茶に行くだけ。でも、ひと付き合ひのすくないわたしは男のひととお茶に行くと言え、母は内心穏やかでないだろうと思つた。だから黙つていた。

なんとなく、行つてみたらどうだろうと思つたから、ミミズクとお茶に行つたのだ。ミミズクだつて、何とはなしに、というふうでわたしをお茶に誘つた。だからわたしも、じゃあ何とはなしに、という気持ちでミミズクに返事をしていた。

「金魚鉢はどう？」

「うん、いつもどおり」

「そう」

電話越しの母の声は、羽のようにやわらかい。しかし金魚鉢の説明をすこしでも怠つたときには、チクチクと刺してきた。

一度ひどく叱られたことがあつて、それは引越したてで金魚鉢の場所を訊かれたときだ。どこに置いているの、と、娘が独り立ちしたばかりのしんみり声で、云われた。だから咄嗟にベランダよ、と云つてしまつた。

すると叱られた。

それはあなたを育てた金魚鉢よ。なのにベランダに置いているですつて。あきれた子ね。人様に見せるものぢやありませんよ。

そのあとチクチクと刺され続けて、夕ご飯の時間になつてようやく羽に戻つた。それぢやあね、とか、体には気をつけるのよ、とか終わりに近づくとなつたしとの距離が物理的に離れていることを母は思い出す。

ミミズクの名前はほんのすこしも出さなかつた。隠す理由もないことが、じゆうぶん隠さなければならぬことだと思ふ。

春猫とはどこで出会えるんだろう。

母に聞いてみようかと悩んだが、けつきよく踏み出せずに電話が終つた。ベランダに置いたままのビールを取りに行くと、昼の空にまた小雨が降っている。

隅に置いた金魚鉢にトツトツと雨が誘ひこまれていた。縁に当た

ると、足を滑らせたように底へと流れ落ちる。わたしは金魚鉢を抱え上げ、ペランダの外で逆さにした。

底にへばりついた滴はなかなか云うことをきかない。それでも何度か鉢を振って、滴を地上へ落とす。

金魚鉢に一度入れれば、外へ出すのは難しい。春猫をここに入れたらどうなるだろうと思った。子猫なら出られなくなってしまうかもしれない。成人した猫なら、勝手気ままに出られるのだろうか。

金魚鉢をもとの隅に戻す。ビールを捨てて、傘を取った。

ゼミの課題やった？ やってない。てゆか忘れてた。先生気にしてたよ。うっそ、聞かなかったことにする。知らんからね。えー、助けてー。やだ。

プシュー、とドアが開いて二人組の女の子が出ていく。駅を見て、同じ大学の後輩だと知った。すぐに別の学生が乗りこんで、車内はすこしだけ混雑する。

スマホを開くと、ミミズクからのメッセージがあつた。いま、暇？ 二秒だけ考えてから、既読は付けずに鞆へ仕舞う。

すこし揺れて、景色が走りだす。吊り革に立つ女性のコートに、黒く大きなボタンが付いていた。そのボタンに映っていく景色を、わたしはなんとなく見つめる。

都会とも田舎とも云えない形が、魚眼レンズのように過ぎていった。知らないようで知っている景色。変わるときは変わるし、変わらないときは変わらない形だ。

ミミズクとは図書館で出会った。棚の隙間をあっちへこっちへ行き来する間、なんとなく視線を感じる。見たことのない、けれど年の近そうなひとが、不思議そうにこちらを見ていた。ただぼんやりしているのだと思って、またあっちへこっちへをする。そうしてやっとソファへ落ち着いたとき、○○だよな、と声を掛けられた。

え、そうだけど。相手はなんだか親しげな口調だったので、タメ口で返した。誰だかはわからない。

中学で一緒だったんだよ。え、あ、うん。誰だろう、と思ってそれが顔に出たらしい。相手はわたしの知っているひとの名前をいくらか上げた。最後に、××と云って、わたしがそれを繰り返すと、うん、と云う。思い出した？ と訊かれて、咄嗟になんとなく、と答えた。

××、が名前だったらしい。ピンとこないうえに、相手の名前だと

思わなかったから、もう頭からこぼれてしまった。彼は、全然変わんないな、と笑う。

よく云われるよ、と答えた気もするし、そっか、と返した気もした。誰だかはちつともわからない。ちつともわからない不安に、ちよつとばかり幸福な嬉しさを感じ始めていた。

今なにしてんの？ 全然想像できないんだけど。彼は照れくさそうに訊ねる。てゆか中学の奴らとつるんでないわけ。〇〇って全然話してるイメージなかったわ。なんてゆうか、話しかけづらいオーラ出てたし。

誰だかわからない彼は、適当に微笑むわたしに、はにかみながらたくさん話しかけた。そして妙に畏まった顔で連絡先を交換して、ぢやそろそろ帰るわ、と云う。わたしは、さよなら、とも、またね、とも云えずに、ただ「おつかれ」と返した。

だからそれ以来、彼はミミズクだった。彼の手にあつた本が『ミミズの生態』で、それを咄嗟にミミズクと読み違えたからだ。

声を掛けられた。

「お客様。よろしければ、お手に取って見られますか」

百貨店の店員さんが、にこにことして傍らに立つ。硝子戸の前で立ち止まり続けるわたしに、痺れを切らしたのかもしれない。わたしは咄嗟に、あ、はい、と云った。

くると手首を返し、器用にカギを開ける。どうぞ、と丁寧な所作で硝子戸の中を示された。なんとはなしに、手前の一番大きな瓶を取る。でも、じっくりと観察するつもりは全然なかった。

ウズラの透明標本だ。瓶の中で、薬品に浸されて透明になったウズラがいる。体を丸めて、まるで卵に還ったみたい。ゼリーのよう透明にされた筋肉と、赤と青に染められた骨が生きたときのままだに繋がれている。

赤い骨が硬骨、青い骨は軟骨。焼き魚のように大きく、澱んだ瞳と、羽を失った前足がわたしを見た。ちよつとしたエイリアンだ。

わたしは赤の他人とバトンリレーをする。勝手にはじめたことで、誰も知らないことだった。

前にここへ来たとき、ちょうど同じように、ひとりの少女が透明標本の硝子戸を眺めていた。五分ほど観察して、どこかへ行き、五分後にまた戻ってくる。店員さんに声を掛けられないようにしているらしかった。少女は何度もなんども同じことをして、硝子戸の向

この世界を憧れる。

「これください」

そう云えばいつだって自分のものになるのに、わたしがどれだけ待っても手に取ってくれない。

ただ硝子戸を眺める少女の表情が、いいなあ、と思う。べつに微笑んでいるわけでもなくて、真剣なわけでもなかった。ぼんやりとしている。そのぼんやりとした表情が、とてもうらやましい、気がした。

少女はやがて時計を気にしはじめた。そしていつのまにか、硝子戸のほうではなくて、その下の安価な透明標本のキーホルダーを手にしている。そのまま、彼女はレジのほうへと消えていく。

「これください」

わたしは瓶の隣にある、透明標本のミニ冊子を指さした。以前に、透明標本のキーホルダーを買った。少女が買ったものと同じものを手にしてみた。家に帰って、さっそく金魚鉢に入れてみる。はじめはきれいだと思った。でもやっぱり、それは春猫ではなかった。

こうやって、彼女が手に取らなかった透明標本に触れていると、すこし気持ち悪いと思う。

好きなことをたくさんしていい子どものはずだった。それとも少女にとつて、好きなことは透明標本に憧れることだったんだろうか。もつたいたいと思う。でもそれと同じくらい、少女のあの顔がとてもうらやましかった。

「そちらは無料のもので、ご自由にお持ち帰りください」

店員さんはにこにことして、硝子戸を閉める。また丁寧な所作で、今度はカチャリと小さな音がした。

いつも誰かとのバトンリレーは失敗する。少女とのバトンリレーはとくに駄目なものだった。それが少女だから、とくにいけないかった。

春猫は見つからない。金魚鉢はちつとも埋めることができなかった。

ふと、あの麻雀屋へ行こうかと憧れる。行けば春猫が見つかるかもしれない。

でも、きつとわたしから行ってはいけない。それは単なる好奇心だ。春猫は、好奇心ではけして見つからない。

そのときだった。

去っていく店員さんの後ろを、スニーカーが通りすぎるのが見え

る。その紐が、縦結びだったことに、わたしはびっくりと気付いた。

走った。わたしは走りたくなかった。でも、心が先に走りだしていた。

硝子鉢の壁にぶつかる。

よるめいて、だから追いつくことはできない。慌てて駆け出たときにはもう、彼は十字路を曲がった後だった。信号に引っかかる。赤いランプが点灯した。

ひどく息が上がっている。どうしてだかわからない。百貨店の入口から通りへ数メートル走っただけだった。走ったと云っても、ほんのすこし。なのに息が上がっていた。

膝に手を当てる。俯けば影が濃かった。いつのまにか小雨が止んでいる。車の音や、人のざわめきや、葉の擦れる音や日差しや、羽音や電車の風や視線や時計や空や、耳に肌の焼ける感覚に苦い味に心臓の動き、ビル、噴水、壊れかけの塾、地下へ降りる階段、コンクリート、高架橋、空へ上る駐車場、子どものキーホルダー、白いワンピース、紫陽花。うるさい。でもほんとうは静かだった。

なんとなく泣きたくなかった。泣こうと思うと、そこで終わる。どうして泣きたいのか、答えられない。なんとなくぢや許されないのかも。

膝を抱えてみた。ねえ、わたし、へん？ 咳いてみても、涙は出てこない。

信号が青になった。ゆっくりと立ち上がる。そのまま、わたしは平然と家路についた。

夜はネットの動画を見るのが日課だった。

ベランダの戸を開けて、白いカーテンをなびかせる。そこに金魚鉢を忍ばせて、カーテンの裾に見えたり見えなかったりするのを、ひそかに遊ばせた。

卵が空から落ちていく。ほんとうは、建物のベランダから。

はじめは二階だった。その次は四階。七階。そしてだんだん階を上り、屋上を目指していく。ふわりと空を飛ぶわけでもなくて、それは真っ直ぐに地上を目指した。

大げさな音もなしに、衝撃吸収マットの上に直立する。中からとろりとした何かが出るでもなかった。何度も見ているけど、この映像で卵は決して割れない。

それでも卵は、屋上へ上るたびにひとつ、またひとつ、落とされていく。実験者が興奮したようにリポートをした。カメラの向こうで助手が卵を手放していく。

唐突にスマホが震えだした。着信のようで、長く震えている。それでテーブルから今にも落ちそうなスマホを掴まえた。

はい。

「あ。おつかれ」

聞き慣れたミミズクの声が届く。あ、うん。おつかれ。横目で時計を見ると、もう二十二時か、と思った。

「あのさ、」

「うん」

「今度、また図書館来る？」

今度。今度って？ ああ、えっと今度の日曜日。……うん、まあね。

「ぢゃあさ、そのあとライブ行かない？ さっき中学の奴からチケット貰ってさ。まあ、そいつが出るライブなんだけど」

ライブ？ うん。ミミズクの声がいつもと違う。電話だからかもしれない。そう考えて、でもやっぱり違う、と誰かが云った。

「中学の奴らもけっこう来るって。それで、そのあと飲みに行こうってさ」

「そっか」

「紹介しろとか、連れてこいとか言われたしな。何言ってるんだろな、あいつ。ハハ。ホラ、覚えてない？ 同じクラスだった……」

ああ、うん、なんとなく。あ、そうなんだ。へえ、近くだね。うん……うん、そっか。

変わる。自分の声が変に上擦っていくのを、わたしは嫌だと思つた。咄嗟にカーテンを見て、自分が呼吸しているのを確かめる。ミミズクにはもう、あの何とはなしに、の口調がなかった。だからわたしも、何とはなしに、の調子を被ることができなくなっていた。遠くで卵の落ちる音が聴こえる気がする。聞き慣れてしまったから、いけなかった。今の生活に溶けこもうとしているから、駄目だった。ミミズクは春猫じゃない。

カーテンが揺れた。

春猫はもつと、たぶん気まぐれで。たとえば水に入れば溶けてしまふような、そんな動物だった。

ごめん、そろそろ行かないと。わたしは母を真似て、しんみり声

でそう云う。

「え、うん。そっか。：：：ぢやまた今度な」

おつかれ。わたしはまた、それしか云えない。
すつと手の力を緩めるだけで、それは何の疑問も云わずに離れていく。真つ直ぐに手放すか、すこし躊躇つて手放すかで、卵の割れ方はきつと変わった。助手は、何度も繰りかえされる動作に疲れきっているような、そんな無表情で卵を手放す。割れてほしくないはずなのに、ほんとうは割れてほしいように。

さん、に、いち。実験者がカウントする。手に力をこめた。：：：割れてほしくない。でもほんとうは、割れてほしい。ねえ、それを黙っていてくれる。：：：うん。

十二階から卵が落ちていく。空の色は一気に地上のパンへと映り変わった。だからぱりん、という音をわたしたちは空想する。

おおつとく、これはどうだつ！——ああ！なんと、割れていません！

そんなことなどを、わたしは空想する。

たとえば。たとえば、今ここで、あの青年から電話がかかってきたら。わたしは躊躇うふり、だけをする。

海へ行きませんか、と。春猫がそこにいるかもしれないから。ここからぢやずつと遠いけど、線路沿いに歩いていけば、きつと辿り着きます。

海。どうしてわたしを誘うのだろう。青年は海へ行けば溶けてしまふのに。わたしはそれを、きつときれいとも思えずに混乱しながら見てしまうのに。

外はもう、雨がなかった。だからわたしは、何も持たずに家を出た。

終電近くの駅から吐き出される人ごみの中を、わたしは掻き分けて歩く。

水溜まりが溢れていた。ときおり足に絡みつく。塾帰りの子どもが、いじけるようにしてそれを蹴っていた。空中へ放り出された水の下から、紫陽花の花びらがわずかに覗く。

信号が止まっていた。車の往来がない。駅から離れると、わたしの知る街はどこかへ薄らいでいくみたいだった。

誰もいない横断歩道を渡っていると、向こうから知らない虫が歩いてくる。サカナかもしれない。ゆらゆらと歩いて、青い骨を尾び

れのようにそよがせていた。赤い骨が鱗のように見える。

そのサカナは、半透明な足で横断歩道を渡っていた。ちよこちよこと規則正しく渡っている。すれ違いうわたしにちっとも気付かない。律儀に交通ルールを守っているようだった。

わたしは不躰なほどにそれを見る。でもすこしするとおかしな心持ちになって、顔を背けた。

足取りが重い。水の中を歩いている感触があった。切るように進んでも、なかなか通してくれないあの感じ。振り返ると、あのサカナはもう向こう側へ渡っていた。

わたしはたぶん、ルールを破ったんだと思う。その証拠に、こうしてここへやってきていた。声がする。横道へ入ると、帰りがけのひとつたちとすれ違った。いくつかの声がくぐもって、わたしの隣をすり抜けていく。

あの麻雀屋は、あたりまえだけど数日前のとおりにちゃんとなつた。青年の洗っていたマットがすこし汚れて見える。「麻雀」と書かれた看板が、趣味の悪い色で光っていた。

中の様子は全然わからない。誰がいるのか、誰もいないのか、探りようがなかった。ただ、中へ入ったって何も変わらないことだけは知っている。

わたしは、汚れた赤いマットをすこしだけ踏んでみた。何の感触もない。踏んでいるのかいないのか、どっちだっていいような気になつてきた。それでほんのちよつとだけ、ごしごしと靴底を押し付けてみたりなんかする。

麻雀なんて、行ったこともない。行くような友達付き合いもなかった。いたって普通の、むしろ表だけの、繋がりがたくさんあった。それだけだった。それだけ、わたしが鱗をまといすぎたサカナなのだった。

一度足を上げて、それから箒で掃くようにマットを撫でる。わたしの付けた汚れが、それで掃き出されるわけでもなかった。

まずい、終電間に合わん。おい、やめてくれよ。嫁に締め出されるって。二人組の会社員が叫びながら駆けていく。帰ろう、と思つた。

わずかな明かりが頬をよぎる。誰かがカーテンを開けたみたいだった。中からくすくす笑う声がこぼれてくる。明かりに目を細めると、ふいに窓が開いた。

「坂本くん、そこ錆びてるから気を付けてね」

はーい。
ずつと間近で聴こえた声に、ひゃっ、と声を上げる。すると、相手もそれに驚いて窓の手を止めた。もう片方の手に雑巾を握っている。

わたしは青年と目が合った。お互いに驚きすぎて、口を半開きに合っていた。かろうじて、青年の黒いエプロンだけを視認する。やっぱりその紐は、縦結びだった。

でも、首や腕は思っているよりも肉付きがいい。遠目から見ただけより血色のいい肌をしていた。それに、ずっとひと、らしい。わたしは自分でも意識するほど、ゆっくりと慎重に口を閉じる。

どうしたのー。男のひとの声がした。青年は目が覚めたように、固まった表情で部屋を振り返る。

「あのー」
その隙間を突くように、わたしは声を掛けた。そして青年からは離さずに、ポケットの中をぐるぐると探る。

「あの、これ落としましたよー」

透明標本のミニ冊子を掴み当てて、青年に差し出した。

青年はぼんやりとして、ほとんど無意識のように冊子を掴んだ。それからじつと手のものを見下ろしている。

その顔がみるみる困惑していくのをわたしは見届けた。わたしは青年に向かって、きれいなお辞儀をする。顔を上げてにこりと笑って、そうして背中を向けた。

今日の運行を終えて、駅が明かりを消していく。線路の時間も踏切の時間も、一日の抽斗に仕舞いこまれていった。

そつと気付かれないように、線路に上った。

そうすると気持ちよかった。いろんなものの風を感じる気がする。靴をひとつずつ持って、両手を広げてみる。ひたひたと裸足でレールの上を歩いて行った。海の中を歩くみたいだと思う。今度は、漂うように。

潮の匂いがある。ペランダの戸を開けたままだった。白いカーテンが金魚鉢の上を泳いでいるのを、わたしはひとり想像してみる。